

## 発表要旨

佐藤 厚「朝鮮時代、寺院で刊行された民間信仰經典－『天地八陽神呪經』を中心として－」

報告者は近年、朝鮮半島における『天地八陽神呪經』（以下『八陽經』）の流通に関心を持ち調べている。『八陽經』は唐代ころに成立したとされる中国成立經典で、内容は、家屋の新築や引っ越し、葬祭や結婚の日取りについて、当時の人々が恐れていた土地神や方位神などよりも『八陽經』読誦の威力が強力であることを説いている。これは東アジアから中央アジアにかけて広く流布したが、とくに朝鮮半島では邪を祓う經典として重視され、現在の韓国でも在家信者が読誦する代表的な經典の一つになっている。テキストの刊行を歴史的に見ると、現在判明したところでは 16 世紀半ばから 20 世紀に至るまで 18 回、寺院で刊行されている。ここで特徴的なのは、『八陽經』が単独で刊行されるのではなく、『太歳經』や『地神經』など 14 種ほどの經典と一緒に刊行されていることである。こうした經典群は、現在は巫俗や盲人が厄除けや家内安全祈祷の儀式に用いるもので、思想的には仏教と道教が習合したものが多い。韓国の民俗学ではこれらを「巫經」と呼んでいるが、報告者は「民間信仰經典」と呼ぶことにしたい。その理由は、これらが寺院で刊行されていたことからみて、朝鮮時代には必ずしも巫俗だけの専有ではなく仏教僧侶が関与した当時の「仏教經典」でもあるからである。発表の中心は次の二点である。

第一には、『八陽經』とともに刊行されていた「民間信仰經典」の内容と用途について考察する。従来の研究では經典の内容についての言及はあるものの、その用途つまり何の目的で読誦するのかについての研究はされてこなかった。報告者は、宗教の社会的機能を探るためにはこれを明らかにすることが必要であると考えている。その方法として、現代における民間信仰經典群の代表的なテキスト金赫濟『消災吉祥仏經宝鑑』（1966 年）の記述などを参考にする。

第二に、とくに『八陽經』に絞ってその用途を考察する。『八陽經』は 18 世紀後半になると經典群の中でも強調されるようになる。邪を祓う靈的機能は、人に病気を引き起こす死靈の除靈に用いられるほか、あの世で苦しむ亡者への追善の經典として扱われている。その靈的機能から『玉枢經』、『玉甲經』、『奇門經』とともに邪を祓う機能を持つ四大經典の一つに数えられる。『八陽經』は現在でも読誦され信奉されているが、靈的機能は変化している。韓国の信仰団体「天地八陽神呪經会」が記す『八陽經』の功德を見ると、子供の大学受験の合格や、事業の成功など、現在の韓国人が求める現世利益へとその内容を変えている。民衆が「あの世」や鬼神を信じた時代にはそれに対する靈的效果が期待されたが、現代社会においては現代人ならではの欲望を充足させる方向に靈的效果が変わっているのである。

## 細井浩志・中村琢「『暦林問答集』の新写本について」

『暦林問答集』は、賀茂在方が応永二十一年（一四一四）正月に著した問答形式で暦数について解説する書物である。上・下二巻よりなり、上巻は「積天地第一」から「積月建第二十四」までの二十四段、下巻は「積土用事第二十五」から「積金剛峯第六十四」までの四十段という構成である。賀茂氏は十一世紀～十六世紀の日本における暦道・陰陽道の支配者であり、在方は賀茂氏本流である勘解由小路家の陰陽師である。日本中世に流布した暦注関係の書物は数種類があるが、『暦林問答集』は暦道賀茂氏の正統的知識であり、中世の暦数観・宇宙観を表し、中世の朝廷陰陽道を理解する上でも貴重な書物といえる。また本書は江戸時代になって版本が出版されて巷間にも流布しているので、一般の暦日禁忌などの思想にも影響を与えたと考えられる。

『暦林問答集』は中村璋八氏の研究と校訂（「暦林問答集について」『日本陰陽道書の研究』汲古書院、一九八五年）があり、校訂本は天理図書館吉田文庫蔵本を底本とする。また中村氏は二〇〇〇年刊行の増補版での追記で、東北大学蔵本と文明十六年（一四八四）古写本の存在も紹介している。

報告者（細井）は二〇一三年に国立天文台を介して、青森県在住の古谷義昭氏が『暦林問答集』を所蔵していることを知り、簡単な調査を行ったところ新写本であることがわかった。その後、二〇一九年十一月にもう一人の報告者（中村琢）と再度調査を行った。報告者（細井）はさらに東北大学蔵本の調査も行い、これらをあわせて『暦林問答集』の書写過程について一定の知見を得ることができた。

京都府立総合資料館（現・京都府立京都学・歴彩館）蔵本には後記があり、「竜集甲午孟春日在方誌。右暦林者、祖父在方卿書之。然者依 持明院殿御所望写之、奉備覧者也」とある。これは東北大学蔵本と同じであるが、東北大学蔵本にはさらに、「永正十六年〔己卯〕三月九日 従三位賀茂在基/暦林作仁王百二代後小松院御宇応永十一年甲午 至当今天正十三年乙酉 一百二十七年云々」「天正十三〔乙酉〕年霜月吉辰写之畢 南陽房了政/正本十三小池与介末孫令借用写之者也」とある。つまり永正十六年（一五一九）に在方の孫の在基が書写し、それを南陽房了政が天正十三年（一五八五）に小池与介末孫から借りて写したものである。また古谷氏蔵本は、在基の識語の後に「右以或本令書写之加校畢。/于時天文十三年極月廿日 中原遠忠」などと続く。ここから本写本は天文十三年（一五四四）に、大和の武家歌人として有名な中原（十市）遠忠が写し、その後、新薬師寺奥房・法隆寺中院で転写されたものであることが判明する。この二写本や文明古写本は、本書が戦国時代に寺院を中心に広まっていったことを示している。

本報告では古谷氏蔵本を紹介して、今後の『暦林問答集』研究に資することを目的とする。

## 川野明正「シナ海域石造獅子・狗犬文化圏からみた沖縄村落守護シーサー」

沖縄に分布する「村落守護シーサー」（獅子）（舞獅子と区別するため、敢えてシーサーと呼称）は、「火返し」や「悪風返し」等、沖縄での辟邪の観念によって村落守護のために立てられる石造物である。

『球陽』巻八、尚貞王二十一年(1689)に、沖縄本島南部富盛集落の石獅子に関連して、琉球王府の蔡應瑞が富盛集落の要請で風水鑑定を行い、八重瀬嶽が火事の原因となる「火山」（ヒイザン）と判断されたために、石獅子の造立を指示した記事があり、これが最古の村落守護シーサーである。八重山諸島でも、1864年に八重山からの要請で、琉球王府から派遣された鄭良佐が、各集落の風水を鑑定するなかで、石垣島舟越集落・大浜集落、西表島祖納集落で、悪石に対して獅子像の造立を指示し、『北木山風水記』に記録する。

先行研究では、長嶺操氏が、『写真集沖縄の魔除け獅子』（沖縄村落史研究所、1982年）で集成されている。その後、鈴木一馨氏に村落の防護林「抱護」との関連に着目した研究等があり（「沖縄本島における抱護と村獅子の分布について」『歴史地理学』第54巻第4号、2012年）、在野の研究者である呉屋善昭氏・城間弘史氏・若山恵里氏・若山大地氏が、沖縄の村落守護シーサーについて網羅的な研究を行っている（若山恵里・若山大地「沖縄の石獅子—沖縄本島の村落獅子四十五体の解説」『民藝』No.795号、2019年）。

発表者は2017年から2020年まで、毎年沖縄本島と島嶼で悉皆調査を行い、現存獅子像だけでも87集落に涉って分布し、147体が集落守護の目的で存在することを確認した。この調査で得られた基本情報として、獅子像の地域分布・類型・役割と辟邪の対象物・獅子像の向く方角・集落での配置数等の調査結果を本発表で提示する。琉球王府の官僚が特定の対象物に対して立てることを指示した獅子像も、集落により集落四方の隅に獅子像を立て、あるいは島嶼部（波照間島）では複数体を他の島嶼の大岩に向けて立てる事例もあり、村落守護シーサーは民間において独自の展開をみせており、その様相を探りたい。

沖縄の村落守護シーサーは、沖縄での風水説の理解が背景にあると思われ、その点東シナ海・南シナ海に分布する「石獅爺」（金門島）、「石狗」（広東西部・海南島・ヴェトナム北部）、「石狗」（朝鮮半島南部）等と呼ぶ各地の石造獅子・狗犬像とともに、風水説上の観念にも関係する霊獣像として、共通の性格を有すると思われる。そのため、沖縄の村落守護シーサーが、これらシナ海域の霊獣像のなかで、いかなる特徴を有するかという関心から、形態的特徴・霊獣像の役割と辟邪の対象物・集落間の対立に言及する伝承等の諸点から比較的に検討し、シナ海域の石造物における沖縄村落守護シーサーのもつ位相がいかなるものかを探りたい。

## 臧 魯寧 「「質形」と「神形」—六朝の尸解思想における形神観念の展開—

晋の葛洪の『抱朴子』内篇には、尸解仙に関する記述が見える。成仙するには、まず死を遂げなければならないことから、天仙、地仙に次ぐ最下位の仙人と位置づけられている。また『抱朴子』内篇には、葛洪の時代に存在した道書を記録する遡覽篇がある。その中には、『尸解経』が録されている。尸解をめぐる先行研究では、具体的事例、歴史的展開、また思想的背景などの角度から幅広く考察されてきた。

後世、尸解の術が詳しく記述され、「白日昇天」や「太陰練形」といった要素が加わり、具体的な道術に発展していた。しかし、初期の尸解仙の事例、例えば、後漢時代に成立したとされる『列仙伝』に見える記述には、尸解について殆ど具体的に説明されることはなく、また物語性も欠いているように思われる。さらに、初期の記述に見える人間の肉体の代わりとして受動的に残される物は、後世になると、修行の道具として扱われるようになっていく。

時代の流れとともに諸々の要素が複雑に絡み合っていくのは、ごく普通の文化現象であるが、道教の教理と經典の枠組みが構築されている六朝隋唐時代にわたって、尸解思想の展開がどのように形神観念の変化の影響を受けていたか、という問題には注意が必要である。

初期の尸解思想と比べ、後世の尸解に関する記述はかなり異質な要素を持っている。書誌学の立場からすれば、成立年代を精確に保証できない書物も多い。したがって、本発表は上記の点を踏まえ、敢えて俯瞰的な観点から、検討の対象となる尸解の概念を漢末から六朝時代に拡大する。そして、以下のように形神観念という視点を導入し、尸解仙の事例の記述における累層性に焦点を当て、尸解思想の展開の考察した上で、六朝時代の形神観念の変遷と特徴の描写を試みる。

まず『列仙伝』を中心に尸解の「解」の意味に注目しながら初期の尸解の事例を考察し、その思想的背景となる形神観念を検討する。次に、六朝の仙伝や上清經の經典、後世の類書にある尸解に関する記事を整理し、同一人物の記述の異同及び変化を確かめ、尸解の重心が「練神」から「煉形」に偏っていた点について論じる。また、物語に登場する事物が演じている役割の変化も重要なポイントであるため、本発表は特にその中から「杖」を取り上げ、神仙思想と絡めてその思想史的意味を論じる。

尸解思想は、宋代の道教文献にもその展開を見ることができ、南朝梁に一つの完成した形に仕上げられたと考えられる。この現象はその時代の道教の主要人物陶弘景に係る。陶弘景は三教の形神観念を調和させようとして独自の形神論を主張し、尸解における矛盾点を解消するために、「質形」と「神形」という捉え方を提示した。本発表は最後に前述し考察を踏まえ、葛洪の形神観念を意識しつつ、陶弘景の形神論の分析を試みる。

## 王博涵「元朝期杭州の道教と在来道教の関係に関する考察」

元朝の道教管理は、行政区画に従って道録司などを設置し管理する宋代までの措置と異なり、初めて道・路などの行政単位を越え、広大な地域を一括して教団に管理権を与えるというかつてない措置を実行した。具体的には、全真教の丘処機に全国（1223年までモンゴルの領土）、龍虎山（本発表では張天師を領袖とする勢力を指す）の第三十六代天師である張宗演に江南地域、道教を両者の間にある地域に、道教の管理権を委ねた。

道教は元朝朝廷が創建され、元朝のみ存在した道教勢力であり、1. 住持の任命と確認 2. 道観扁額の発給 3. 土地、建築物の庇護などに関わる事情を管理した。道教道士が実際に管理した道観、例えば王寿衍が管理した開元宮、孫益謙が管理した佑聖観・四聖延祥観は、杭州に位置し、龍虎山の管理範囲である江南諸路に重なっている。では、なぜ上述の現象は可能になるのか。道教が龍虎山の管理範囲と重なる地域で活動した過程で、現地の在来道教と如何なる関係を築いたか。

従来の研究を回顧すると、卿希泰『中国道教史』は道教・龍虎山とも正一教に属することに基づき、道教が正一教の教区で発展した表現として、上述の現象を扱う。ただ、王寿衍、孫益謙に関する史料からみれば、道教は江南地域で勢力を振るった原因は、成員と信徒の増加ではなく、朝廷が派遣され道観を管理させたのである。故に、教派の角度ではなく、元朝朝廷が道教を派遣した目的に対する考察から、道教の活動を扱うが必要であると考えられる。

酒井規史の研究は江南の甲乙道観に注目し、元朝から権力を受けた道教・龍虎山が、道士を派遣して直接的に管理することができない在来の甲乙道観と、如何に交渉し共存したについて論じている。本発表では、道教が直接的に管理できる十方道観の例を挙げて、そこで両者の関係を考察したい。また、従来道教の成員を判断する基準が不明確であるため、龍虎山の道士、或は道教の従遊者（道教と緊密な関係を保ったが、道教の成員ではない人物）を道教の成員と認める成果が多い。酒井の研究も上述の認識を受け継ぐため、元朝中後期在来道教が抜擢されたことと、それが道教と在来道教の関係に対する影響を十分に解き明かしていない。

本発表は以下四つの点から先行研究を補充したい。1. 杭州の道教と杭州の在来道教を教派としてではなく、勢力として考察したい。2. 1を解決する一つの方法として、道教の開祖である張留孫に関する碑文にある道教の人員に対する確認と、それらの人々の実際の活動から資料を読み直していくこと 3. 政治史の視点に立脚し、道教の動きと背景から元朝朝廷が道教に派遣した目的を考察し、勢力とする道教の活動を分析したい 4. 道教と在来道教との関係を考察する時、道観の土地購入と修築の事例に注目し、社会経済の視点も含めて交渉を論じたい。

## 二ノ宮聡「宝巻から見る明末清初の碧霞元君信仰」

碧霞元君は泰山の主神・東岳大帝の娘とされる女神であり、心願成就、病氣平癒、子孫繁栄など人々の日常生活のありふれた願いを叶える。その信仰は宋代に始まったとされ、明代以降、山東や北京を中心とする華北一帯で盛んとなった。神格の起源は、北宋の真宗皇帝が泰山に巡幸した際、山頂付近の玉女池で発見した玉女像を祀り、碧霞元君の封号を与えたことに由来するとされる。だが、史実に碧霞元君の由来に関する記述は残されておらず、いまだに不明な点が多く残される。

このように神格の起源に関しては未解明の問題が多々残されるが、人々の信仰活動に目を向けると、明代後期の泰山ではすでに東岳大帝をしのぐほどの香火を集め、民衆の支持を得ていた。

一方、北京では明代に信仰が伝わると貴族の婦女を中心に信仰され、次第に民間へと広まった。特に清代中期以降になると、東郊の丫髻山、西郊の妙峰山、さらに市内の五箇所の廟（五頂）が有名な碧霞元君廟として知られ、民国時期まで大規模な廟会が開催された。また、近年、各地で廟会が復興されるに伴い、北京の碧霞元君信仰に関する研究も活況をみせる。これらの研究は、1925年に顧頡剛が実施した妙峰山廟会調査を基に、比較的資料の豊富な清代後期から民国時期の状況を対象としており、さらに現在の廟会に関する調査も多い。

そこで本発表では、従来の研究ではあまり言及されていない、民間に流布していた碧霞元君に関する宝巻に着目し検討する。例えば万暦年間に編纂された『続道藏』に収録される『碧霞元君護国庇民普濟保生妙経』では、人々を罪業から救うといった東岳大帝の職掌に近い面が強調される。また、『靈応泰山娘娘宝巻』は、万暦年間に黄天教の経典として北京で作成された。そのため九娘娘など北京特有の信仰が色濃く反映される。また清代初期に南無教によって作成されたとされる『泰山聖母苦海宝巻』などもある。こうした宝巻は教団の経典として作られているものの、当時の民衆の信仰の様子を色濃く反映している。よって、これら経典を手がかりとして、東岳大帝から碧霞元君へという泰山信仰の変遷過程、さらに明代後期から清代初期にかけての民衆の碧霞元君に対する信仰の様子について検討したい。

### 三浦秀一「明代中期における王守仁の道教「惑溺」と思潮の動向」

視野を広く取るならば、新儒教の成立やその展開を考えるうえで仏道両教との相互交渉に配慮すべきことは至極当然とみなせるのだが、王守仁（陽明、一四七二～一五二八）個人の思想を分析する限定的な場合でも、両教との内的連関を意識した視点の保持は、中年期の陽明が若い頃は仏老に惑溺していたと悔悟の言葉を残しているにもかかわらず、やはり重要である。

かつて柳存仁氏は、陽明の思想から道教的な要素を抽出する研究を発表された（「明儒与道教」一九六七、などの一連の論攷）。『王陽明先生全集』を通覧し、そのなかから関連する事例を紹介するとともに、それらの内容を幾つかの道典と照らし合わせながら分析されたのである。そして近年、東景南氏は、『王陽明年譜長編』（二〇一七）において、錢徳洪ら王門の人士が編んだ年譜の偏向や錯誤をただし、また空白をおぎなうなか、たとえば若き日の陽明と専門道士との交流を解明された。

注目に値するのは、『年譜長編』弘治九年（一四九六）の項に附記される「性命圭旨作者尹真人考」である。東氏は、万曆四十三年（一六一五）刊行の『性命圭旨』に載る鄒元標序に「この書は尹真人の高弟の手筆に出づ」とある「尹真人」について、弘治九年から数年間、陽明と交流をもった全真道士尹從龍がその当人だと断じ、あわせてその「高弟」に関しても、尹從龍の教えを継いだ趙教常に比定された。

東氏の判断に対しては、『性命圭旨』への綿密な分析をとおして検証する必要があるとも思える。ただし本報告はひとまず氏の認識にしたがい、弘治正徳年間に記された陽明による数題の文章を読み解きながら、陽明思想のなかに道教内丹説が取り込まれていったその経緯などを考察する。

そうした考察の必要性は那邊にあるのか。正徳に続く嘉靖年間、『老子』に対する注釈書が相継いで作成・公刊された。それらはいずれも従来の視点とは異なる立場からの老子解釈であり、その代表にしてまた先駆けともみなせるのが、周知のとおり薛蕙『老子集解』と王道『老子億』である。両著の思想は、広い意味では陽明思想と揆を一にするものであり、既成の国家教学が帯びる形骸化傾向を打開しようとする性格をもつのだが、しかし薛王両者からは、陽明思想批判の発言を見出すこともできる。一方、嘉靖後半には、陽明思想を肯定的に継承する人士による老子注が登場してもいる。

明代中期における思潮の展開のなかで、陽明思想に対する評価の内容は大きく変化する。ではその実態とはいかなるものであったのか。この課題を追究するための前提的な作業として、陽明思想における道教内丹説の位置については従来以上の精確さをもって明らかにする必要がある、また思潮の動向に関してもこれまでとは違った切り口での分析が求められると考えるのである。